詩雑誌「学校」研究（三）

杉浦　静

本稿は、詩雑誌「学校」第三号を紹介・検討するものである。なお、「学校」一・二号については「大妻国文」19・20号に掲載した。

※

第三号は、昭和四年（一九二九年）二月十七日印刷、三月一日の発行である。編集・北山癌蔵、印刷（謄写版）・伊藤信吉、発行・横地正次郎。発行所は、前橋市神明町五四の学校社、定価は二〇銭。二号から雑誌の発行を手伝った伊藤信吉の名前が、本号から奥付に掲載されている。三号に掲載された詩は一八篇、寄稿者一七名であり、そのうち九名がこの号に初参加である。なお、一号・二号の寄稿者は、それぞれ五名・一〇名であった。謄写版刷りの小さな雑誌ではあったが、着実に充実してきている様子がうかがえよう。

巻頭は「私の部屋」。エミール・ベルハーレンの詩の高村光太郎による翻訳である。高村光太郎は、早く明治四三年七月[注1]からベルハーレンの詩の翻訳を発表していた。大正一〇年前後に最初の翻訳発表のピークを迎え、大正一〇年一〇月には訳詩集『明るい時』（芸術社）を刊行した。その後も、昭和四年八月までの間に、「明星」（第二次）、「至上律」、「向日葵」等の雑誌に『午後の時』（全三〇篇）中の二二篇を翻訳発表した。また、大正一四年三月には、『エルハアラン訳詩集　天上の炎』（新しき村出版部）も刊行している。『明るい時』『午後の時』所収詩篇の翻訳は、後に詩集『智恵子抄』（昭16・一九四一）に収められることになる、〈智恵子〉への愛と生活の理念形成に関わる詩との関連においても、日本におけるベルハーレン受容史の上でも重要な問題を提起している。高村が「学校」第三号に寄せた「私の部屋」は、『戦争の赤い翼』（一九一六年刊）収められている詩であり、大場恒明の調査[2]によれば、高村はその初版から翻訳したと推定されている。『戦争の赤い翼』は、ベルハーレンの最晩年の詩集であり、第一次世界大戦におけるドイツ軍の、彼の故郷ベルギー進攻に対する怒りと「憎悪の感情」（高村光太郎「評伝　エルハアラン」）から、「戦争の惨禍と無辜の民の怨恨の叫と傷つける人類愛への挽歌と蹂躙された故国白耳義への望郷と敵国民衆への覚醒の呼びかけとを強い抒情と叙事とに託」（同前）した詩集である。この詩集からの翻訳は、大正九年五月の「一九一五年の春」「病院」（『日本現代詩集　付録泰西名詩選』春陽堂）と、昭和三年七月の「葬式」（「至上律」5号）及びこの「小さな部屋」の四篇を数えるにすぎない。このうち「一九一五年の春」については「評伝　エルハアラン」に、「可憐な小詩」、「卒読に堪へない哀愁の響を持つ」との評がある。「学校」創刊号に、尾崎喜八がヘルマン・ヘッセの第一次大戦後出征していまだ帰還しない恋人を思う少女をうたった詩「少女が家にゐて歌ふ…／（一九一四年十二月）」の翻訳を寄せていたが、この「私の部屋」もその同系列の詩である。

私の部屋

エミール ヴェルハアレン
高村光太郎訳

私の部屋は北方の風に閉ぢてある。
戰爭このかた、
ひっそりと閉ざされてゐる。
しかも、
あんなに風は、
来たり往ったり立ち停っては又飛んでゆく、
大地をゆるがす戰鬪を横切り、
重傷者、戰死者の行列をつれて。

おゝ数知れぬ角鬪と巨大な運命。
はるか彼方、大洋の上では、
面々対して、船が飛ぶ。
武装したツエッペリンが海上を渡る。
キリコルム、クロイスベルグ、ミタウ、ド井ンスク、ヤコブスタアト、フィルナ、
大戰が照し出した町々、
きのふまでまるで知らなかった町々。
おゝ地中の戰、雲の中の戰。
憤怒は其処に集中し、凄惨は其処にいや増す。
野から山、川から森、
一切が一度に暗く、恐ろしく血みどろだ。

戰爭このかた、
私の部屋はひっそりと閉ざされてゐる。
ねえ、一体何処に時日の友はゐるのであるか。

ここの隅では先月、
科学によって一々説明された
われらの美しいいろいろの思想について
沈み勝にしかもはっきりとわれらは清談した。
ここの卓の一隅に彼は手をついて
大言もなく誇張もなしに、
彼の鋭いリリしい言葉で説いた、
人類の希望を。

ここの腰かけにかけたのは
毎夜私の枕元に来て、私の頭脳、
私の血、私の神経が狂乱の嵐に外ならぬ時、
静かに私をなぐさめてくれた彼だ。

ああ何処に一体彼等はゐるのか。
どんな置きざりとどんな投げやりとの中で
あの限り無き悲惨のままに漂ってゐるのか。
ああ、何処に体(ママ)一彼等はゐるのか。
私の時日の友は。

今宵、私の伴侶として、
私が話しかけるのは、その炎が
今にも生き今にも死にそうな暖炉しかなく、
私の魂の中に輝いては消える
暗い又は明るい渇望に
ひとり其が答へるのみだ。

近代科学戰としての第一次世界大戰の様相と、「私」の「閉ざされた部屋」が対比的に描かれる。「人類の希望」を開くものと信じられて

いた「科学」や「思想」が、第一次世界大戦において、ヨーロッパ文明の破滅と荒廃をもたらすものへと転化している現実と「人類の希望」への不安・絶望が、「閉ざされた部屋」という喩によって表現された詩である。

次に掲げられているのは草野心平によるカール・サンドバーグの「カラマズウの罪悪」の翻訳である。

草野がこの時期にサンドバーグに深い関心を示していたことは、第二号に掲載された「無題」の「製糸工場の煙突からは煙は煙突に垂直をなして南に流れてゐる／風呂屋の煙突からも煙は垂直をなしてぬんぬん流れてゐる／サンドバアグを思った」という「シカゴ」（サンドバーグ）を意識した詩句からも明らかである。草野心平がサンドバーグの詩に出会ったのは、中華民国広州の嶺南大学時代である。その当時のことを草野は次のように回想している。

エミイ・ロウエルなどのイマジズムの作品群、E・Eカミングスの斬新なスタイル、それからサンバアグやマスターズやリンゼイの、どちらかといえば左翼的作品にひかれていた。ことにサンバアグの「シカゴ詩集」や「煙と鋼鉄」やその後大分おくれて出た「おはようアメリカ」などから相当数翻訳した程だった。それほど自分は好きだった。（中略）私は母に頼んで河上肇の「社会問題研究」をその創刊号からおくってもらった。母は京都の本屋で捜してくれたらしく「我等」も、これも矢張り創刊号から揃った。「種蒔く人」創刊のことは、日本人クラブそなえつけの新聞で知って、どうしてもほしくなり、日本郵船のK氏に話して金をもらって予約した。そんなような傾向だったので、サンバアグの詩に共感したのもごく自然の成り行きだった。ホイットマンの詩にすら「煙と鋼鉄」という言葉の象徴する二十世紀的なもののないことが不満だった。（『わが青春の記』「孫文とタゴールとの出会い」昭40・6）

この時期を草野自身は「二十二歳の夏」（大正一四年）と回想しているが、「種蒔く人」（東京版）の創刊が大正一〇年一〇月であるから、長谷川渉の編んだ年譜（『草野心平全集』第12巻所収）のごとく大正一一年（一九歳）の時と考えてよかろう。

中華民国滞在時に翻訳されたサンドバアグの詩は現在見ることはできないが、草野は、帰国後の昭和三年から四年にかけてサンドバアグの詩の翻訳を七篇発表している。

昭和三年三月「銅鑼」14号　「塀」
　　五月「銅鑼」15号　「シカゴ」
　　六月「銅鑼」16号　「嘘ッキ」
　　六月「黒旗は進む」1号　「政府」
　　一〇月「黒色文芸」1号　「ガアレイの市長」
昭和四年三月「学校」3号　「カラマズウの罪悪」
　　四月「黒色戦線」2号　「波止場」

これらのうち「シカゴ」「嘘ッキ」「塀」「波止場」が後に『アメリカプロレタリヤ詩集』(3)（昭6・1　弾道社）に収録され、「カラマズウの罪悪」は『現代詩講座第八巻　現代世界詞華選』（昭5・5　金星堂）に収録されている。

また、詩人サンドバアグについては「詩神」昭和四年二月号に「カール・サンドバアグ／人及びその作品に就いて」を、「創作月刊」昭和四年五月号に「カール・サンドバアグ」を書いて紹介しているし、また、「銅鑼」16号（昭3・6、終刊号）の「編集後記」には草野が「『サンドバアグ訳詩集』を近刊する。」という広告もあり、サンドバークへの没入の様子がうかがわれる。

「詩神」に発表した「カール・サンドバアグ／人及びその作品に就いて」は、後に『現代芸術叢書第四篇　現代詩論集』（昭6・7　詩文学社編・現代評論社刊）にそのまま収録されたが、この時期のサンドバーグ紹介としてはまとまったものの一つであり、また、サンドバーグにいかに草野が衝撃をうけ、ぶつかりながらも、それを吸収して行っ

たかがうかがえる貴重な文章である。[4] 草野自身のいずれの単行本にも全集にも未収録であるので、やや詳しく紹介しておこう。

「カール・サンドバーグ ― 彼への回想は五六年前へもどらなければならない。彼の詩集『煙と鉄』『シカゴ詩集』を私は広州の嶺南大学の図書館で始めて見た。ローウエル、マスターズ、リンゼイ、ボーデンハイム、フロスト。それらの誰よりも私はサンドバアグを愛した。今でも愛してゐる。」とサンドバーグとの出会いから筆が起こされ、ついで、苦学した彼と自分との境遇の類似を思い「ささやかな法悦」を得たことが語られる。次にサンドバーグの代表作「シカゴ」の全訳が掲げられている。

世界の豚殺し
機具制作者　小麦の丘
鉄道賭博　全国の貨物のハンドル
嵐の、シャガレ声の、ガンガン声の
二つの肩のどでかい都市
彼等はお前の不行状を俺に告げる　そして俺は彼等を信ずる
俺はお前のガスランプの下の化粧した女共が若い百姓たちをコイ
　コイやってゐるのを見た
そして彼等はお前をやくざ者として俺に告げる　俺は答へる
そうだ、それはホントだ、俺は人を殺してまだ自由に殺しにゆける人殺しを見た
そして彼等はお前をケダモノとして俺に告げる　答へはこうだ、
　女達や子供の顔に俺は不法なる飢餓のしるしを見た答へ終って
　俺はもう一度この、俺の都市を侮辱する彼等に顔をむける　俺
　は彼等に侮辱を返してそして言ふ
来い、頭をあげて生きる傲然を唱ってる都市を見せろ、無骨な強
　固な怜悧な都市を見せろ（以下略）[5]

この後、「シカゴを斯く唱ふ吾々の抒情詩人は何処にゐるか、何処から来たか。」としてサンドバーグの閲歴を簡潔に述べ、その後、突然「何故チャップリンがサンドバアグを愛するか」という話題に転じ、「猫は／ちっちゃな猫足でくる／黙って腰を曲げて／港と街を見渡す／そしてまた動き出す」という詩を紹介し、「このしゃがんでゐる霧はチャーリーではないだらうか。」とサンドバーグの詩の中にチャップリンの姿を発見する。そしてさらに、「ダイナマイト所持者」を訳出する。

おれは独逸サロンの晩餐で「ダイナマイト」と一緒にテキと玉葱
　を食ってゐた
私は笑った　それから妻君と子供の労働の本源と労働階級につい
　ての話をした
それは金持ちになることも血みどろの事がらもあらゆる人生を知
　ってゐる動じない人間の笑ひであった
そうだ　彼の笑ひは嵐の中を突き破り飛びめぐる荘厳な歓喜に満
　ちた灰色の鳥の叫びのやうに鳴り響いた
彼の名前は教会や学校に門を閉めさせる者として国家の敵として
　数多い新聞紙に出ていた
テキと玉葱を前にして「ダイナマイト」としての彼の深甚な生涯
　は一と言として語られなかった
ただ私はいつも彼を記憶してゐる、人生の熱愛者として、子供の
　熱愛者として、総ゆる自由、向ふみずの笑の熱愛者として
　赤い心臓と全世界に溺る赤い血潮の熱愛者として

この詩を「私はこの詩の平凡とこの中にある変に動じないしんとしたものを愛する。「カラマズウの罪悪は猩々緋でも深紅でもない」といふ象徴よりも「玉葱」を食ふリアルから煙だつ「詩」を愛する。」と評価して、サンドバーグの詩法を「暈のかかった月や、れんあいや雪や噴上げや、それに似たそれらから聯想された象徴」といった草野の前世代の詩人たちの、すでに形骸化した〈詩的なるもの〉による象徴によることなく、「公園の野良犬やゴロッキの眼」などの都市下層生活者や〈都市的なるもの〉に据えた視点からの「リアル」な描出に

よって「象徴によって現実以上の現実、或は現実以上の現実」を「展開」したものと位置付けた。そして、さらに、「傑作「煙と鋼鉄」「魔天楼」「カラマズウの罪悪」「偽ツキ」「シカゴ」等のリアルをブチこんだ象徴は長短自由なリズムの波によって、交響楽的効果をもっておしよせてくる。私は彼のこの傾向をこれから吾々が進むべき街道とは思はない。しかしながら、吾々の幾本かの道に、この道のあることは当然でありなかったら寂しくもあるだらう。吾々の進むべき抒情詩に於ては象徴を蔑視しなければならない。」「日本にはサンドバアグの如き抒情詩はあったか。」「恐らく世界のだれもがサンドバアグのやうな都会抒情詩を書いてゐない。だからサンドバアグは偉大だといふ意味には全然ならないにしても、前人未踏といふ芸術に於ける第一義に彼は落第しない。彼の中の詩人は新らしい表現技巧をもって、資本主義の都会を恐ろしく美しく、恐ろしくザグザグに、汗みどろに、又悲しく吾々の前に展開さした象徴（彼の場合は最早象徴ではなく肉であった。形容詞ではなく動詞である代名詞であった。）をもってここまで適確に表現したといふことは、ぼくたちに向ってリアリズムをもって試してみろといふ刺戟でもある。」とサンドバーグの「都会抒情詩」の意義をまとめてみせた。そして、それがいかに草野たちにとって詩法のうえで刺激になったかを語った。この後、「垢がぬけてきて静になった」サンドバーグの詩の傾向の推移を述べて終えられている。

このサンドバーグ紹介が発表された後、村野四郎は「訳されたサンドバアグ」（「旗魚」二号　昭4・5）で、浦瀬白雨・高垣松雄などのサンドバーグ翻訳と並べてこの紹介中の「シカゴ」訳をとりあげ、「少し乱暴に訳され過ぎた」、「その詩自体が粗野だからといつて、それを訳す人の訳し方までが粗暴だつたら、甚だ遺憾なことであらう。」として、草野訳の「シカゴ」に「二三の誤訳と二行の脱訳」があることを指摘した上で、草野が「霧」のなかの「The fog comes on little cat feet」を「霧は、ちっちゃな猫足でくる」と訳したことについて「妙な訳語」だと疑義を呈した。これに対して、草野心平は次号（第三号　昭4・7）に「訳に就いての返答」を寄せ、反論した。そこで、草野は「シカゴ」の詩句の脱訳は認めたものの、誤訳については、村野には具体的な箇所の指摘はないが、村野の誤訳としている箇所を推定した上で、その箇所は全体の構成を考察して「最初の五行で朴訥に気短かにブキブキ訳すことを故意した」ため誤訳にみえるような訳を敢えてしたと説明した。また、「霧」の訳語については、「「Cat-feet」が詩であると思ふので、それを生かさう」として「霧は少さな猫の足のやうに歩いてくる」と訳すべきところを前述のように訳したと返答して、「ちっとも「妙」であるとは思はない。」と反発した。そして、村野が「こう訳すべきだという例を」示さず、さらに、誤訳箇所を具体的に指摘せずに誤訳を言いたてる態度を批判した。この草野の返答に対して村野四郎は同誌に「それに応へる」を書いた。村野は、草野が「故意に」誤訳したと反論したことに対しては、「訳詩の信条」に問題を展開して応酬した。

いま草野君が初めて、原詩を読むにあたって、その語句の正しい意味を知ってゐたとしたならば、恐らく貴君は、その正しい意味によって、最もよく（貴君が理解しうる限りに於て）原詩を理解し得たのだらう。それであるのに何故故意の誤訳などするのであらうか。なに故正しい解釈による貴君の理解のマキシムを訳出しようとしないのであらうか。そこにこそ、訳詩の本当の難しさがあり、翻訳者の苦心があると僕はおもふ。つまり、誤訳をするや否や既に貴君自身に矛盾がある。

また、「猫足」の問題に関しては、「猫足」という語が猫の歩き方を意味するものでなく、一般に膳や碁盤の脚以外を意味することはないと述べた上で、それは「感覚に訴たへる効果を予期しての草野君の新造語」に過ぎず一般性を持たないとし、草野心平の翻訳に「自分の主観にのみ重点をおきたがる」「危険な態度」があると指摘した。

この時の草野と村野の応酬について、草野は、後に村野の死後書いた「村野四郎追悼」[6]に「広州の大学で読んだのは米英の詩で、その中

でも私はサンドバアグに一番ひかれていた。訳しもした。（大正　稿者注）十五年に日本に帰り、訳したいくつかを雑誌に発表した。それらのうちの一つに「港」という詩があったが、それは the fog comes on cat-feet に多分はじまった筈だが、cat's feet でなく二つの名詞を-で結んで一語にしてしまったところに私は新鮮な魅力を感じ、私はこれは直訳でなければいけないと思い「霧は猫足でくる」多分そんなように訳した筈である。それが村野四郎にやっつけられた。私は反駁した。」と回想している。

ここでの村野と草野の応酬の根底にあったのは結局詩観の相違であり、詩に対峙する態度の相違であったろう。草野の応答に見るように、草野は恣意的といえるほどの自由な翻訳をしている。訳語の正確さ、すなわち当時の日常の日本語や詩語として通用している日本語に訳語が合致するかということ、にほとんど意をはらっていない。むしろ、あえて日常語のコンテクストを無視するかのように強引な語法を選び取っているのである。そこに「短歌的形式や抒情をふりきれずにいた詩界に与えた衝撃」（深沢忠孝）[7] があり、「語法が、呼吸が、生命感的にダイナミック」[8] であって刺激的な情操を感じさせた要因があったのである。とは言え、ここでの草野の訳が、不用意であり、村野の論難が正当であること、さらに、村野への草野の反駁が弁解と強弁に満ちていたことは、疑えない。

カラマズウの罪悪

カールサンドバアグ
草野心平訳

カラマズウの罪悪は猩々緋でも真紅でもない
カラマズウの罪悪は囚人の灰色、鉢水の褐色
カラマズウの罪悪を罪する者は猩々緋でも真紅でもない
彼等は褐色と灰色に走る—そして彼等の一部は雪よりも白く洗はれることを唱ふ—そして或る者は：吾々は悶える

さうだ　カラマズウは地図の上の一点である
客車が止り
工場の煙突が煙り
日曜の夜には雑貨店がひらき
街路は市民権をもってゐるものに開放され
そして住民は戸口調査簿にのってゐる
日曜の夜はでっかい夜だ
カラマズウの日曜の夜を
君の耳できけ
そして君自身に言ふがいい　おれはアメリカをきく
おれはきく
おれは何をきくだらうか
主要道路は都市（マチ）の真ん中を走ってゐる
汚ない郵便局がある
汚ない停車場がある
そして合衆国国旗が叫んでゐる叫んでゐる
星と縞とが
リンカーンの誕生日と七月四日の
四っつの風に向って

カラマズウは何かこう違いものの手に口吻ける
カラマズウは長い地平線に呼びかける
震へてる銀の天使に
腹匐ってる神秘な「何んであるか」に
「おれたちは此処にあるからおれたちはここにあるがカラマズウの唄だ（ママ）
「行くところを知らない　だがおれたちは歩いてゐる」がその言葉だ
広場には青銅の猟犬がゐる　猟犬は広場を遠くまで見廻してゐる

カラマズウの恋人達は
郵便局の配置窓にゆく
名前を言って手紙を求める
そしてまた聞き正す「きっとありませんか　もう一度見て下さい
　きっとありますから」

そして恋人達は市庁にゆく
彼等の名前を告げそして言ふ「私共は免許状が欲しいのです」
彼等は家具屋へ行きベッドと時計を買ふ
子供達が育ち「どうしたら時を過ごせるか」を言ひ合ふ
彼等は育つ　ステエションにゆきテクサス、ペンスィルヴァニア、
　アラスカ行の切符を買ふ
彼等は言ふ「カラマズウはこれでいい　だがおれは世界を見たい」
世界を見渡すと彼等は何処も彼処もカラマズウとおんなじだといっ
　て帰ってくる

汽車は東からくる　踏切りをツッ走る
桃の田舎、西方シカゴにブンブンいひながら行ってしまふ
汽車は西からくる　戦争湾（バットルクリーク）の朝餐のバザアに走ってゆく
そしてまたデトロイトの化物の空に
「おれはアメリカをきく　おれはきく　おれは何をきくだらうか」
カラマズウの人道をぶらつきながら　一人の浮浪人がそういった
ぶらつきながら　質問しながら　看板を見ながら

おゝそうだ　カラマズウといふ名前の都市（マチ）がある
汽車がそこで躊躇する地図上の一点
おれはそこで五銭や十銭均一の店の看板を見た
それからスタンダード石油会社と国際禾穀会社
墓地と球場

小麦の株を買へる短期手形の張場と
「しづかな遊戯をお探しですか」と番人が信用深そうに色目で話す
　プールと

浮浪人は歩るき廻って尋ねる
「此処ではギターを作りますか
唄ふ木風が好み分け低く唄ふ糸をつけますか」
答へは「私共は楽器を製造するのです」

私はピンのやうな尖塔をもった教会を見た
ショウウキンドウに棺桶を並べた葬儀屋を見た
いたるところに満足保障附の看板を見た
ハク製の鳩を殺す射的場を見た
病人には医者がある
牢獄に待ってゐるものには法律家がゐる
犬殺しと道路管理者
電話、水道、電車
そして全世界のカラマズウの姉妹都市から
　くる電報でガヂャガヂャする新聞紙と

浮浪人はぶらつきそして言ふ
カラマズウ、君は君だけで一つのクラスにはゐれないのだ
おれは方々で以前からおまへを見てゐる
おまへがクルミならおまへはクルミだ
ぶらつきながらいまいましそうに彼は言った
カラマズウにくるまへおれは静かだった
いまおれは馬鹿だ、神よ救ってくれ、おれは馬鹿だ

カラマズウ、お前もおれも色褪せてゆく

おれはまづ足からさらわれてゆき
時と雨がおまへを嚙んで埃にするだらう
古い古いおっ母さんが
おれの骨の上に青苔をかぶせるだらう
おまへの郵便局と市庁の石に
青苔がおほいかぶさるだらう

何よりも増して
おれは鬼ごっこしてゐる子供を愛した
そしてまた野球場の塀に彼等の頭文字(イニシャル)を彫ってゐるのを
馬鹿にされたおれが彼等を馬鹿にするのを彼等はいつものみこんで
ゐた

何よりも増して
おれはお前の日没の赤金(アカガネ)の煙を愛した
おれはお前の広場を流れる暈のかかった月を愛した
おれはシロガネの冬の初めの白い夜明けの霧を愛した
そしてまた線路上の紫と木材置場を

カラマズウ、おれはおまへの何ものかを求める心臓を愛した
おれはおまへの夢にさようならを唱った
おれはおまへの望みと唄にさようならを唱った
おれは広場に青銅の猟犬のゐるのを希った
青銅の猟犬がふるへてる銀の天使と匐ってゐる神秘の
「何であるか」を包んでゐる長い地平線に向って前脚でヒッカク
のを

アメリカの架空の一都市カラマズウをえがきながら、〈アメリカなるもの〉の可能性と否定的側面を越えようとする心情をうたった詩であろうと思われるが、『アメリカ・プロレタリヤ詩集』に再録しなかったところから見て、草野はこの詩にさほどの愛着はもたなかったのかもしれない。

なお、『プロレタリア詩雑誌総覧』および、秋山清『あるアナキズムの系譜』(昭48・6 冬樹社)収載の「学校」細目には、この訳詩の名は脱落しているが、伊藤信吉『逆流の中の歌』の「『学校』目次とその解説」には、掲載されている。

この後、草野心平は「学校」には訳詩を寄せていないが、他の雑誌には積極的にサンドバーグ等現代アメリカ詩人の詩の翻訳を続けて発表している。

岡本潤が「学校」に参加したのは、この第三号の「風」からだが、この後第四号に「二人」、第五号に「哄笑は戦ひである—野長瀬正夫に」、第七号に「エピクタテス」を発表し、「学校」の常連寄稿者となっている。岡本潤は、「銅鑼」には九・一〇・一三・一六号に寄稿している。そのほとんどはアナキズム系の論争的散文や感想が多かったのだが、「学校」では雑誌の性格に合せて詩のみを寄稿している。この「風」は、上州のからっ風を思わせるような激しい風を題材にして、その人間を圧倒するような力への反逆の心情をうたったものである。高村光太郎の〈冬〉に近接する詩ではあるが、岡本の場合〈風〉がみずからを鍛える試練の喩ではなく、権力の喩となっているところに特色がある。

風　　岡本　潤

風は横なぐりにやってくる
風は真向からぶつかってくる
風はむりやり俺達の口にフタをする
だから君がどなるのだ

だから俺が口笛を吹くのだ
だから俺達が歌を歌ふのだ

「詩雑誌「学校」研究（一）」補遺

筆者は、「詩雑誌「学校」研究（一）」で、「学校」の創刊にあたって草野心平が念頭に描いたのは、「第二次「銅鑼」以前の、ヒューマニスティックな、そしてややアナーキスティックな雰囲気を共有した「銅鑼」だったのかも知れない。」との推測をのべておいたが、草野自身が「学校」刊行中に「学校」の意図を語った文章が眼にとまったので、以下に紹介しておく。「詩神」昭和四年七月号に掲載された「ささやかな弾片（ママ）」というエッセイの一項目である。

学　校

吾々は謄写版刷りのささやかな詩雑誌「学校」を創めた。吾々は学校で詩を苦しむ生徒である。そして先生である。学校に於ける吾々の意図は、吾々よりも若い少年少女諸君の中にある詩人達が、吾々の「学校」を踏み蹂らなければ詩は書けない—その踏みにじられることの快感のために吾々自身をブチ込んでゆくことにある。同人はない。総ゆる詩を歓迎し、そしてそれへの拒否も当然予想されるでせう。

また、同じ文章の末尾に、「銅鑼訳詩集」の広告を掲載している。これは、「学校」創刊号末尾に掲載された刊行予定の「銅鑼訳詩集」と同じ企画であろうと思われるが、こちらでは、創刊号の当時よりも訳される詩人の数が増加して企画が大きくなっていることが注目される。

広　告

吾々は広告する場所をあまりもたないから、本誌上を一寸利用さしていただきたいと思ふ。銅鑼訳詩集、定価四十銭。内容エミーン・ヴエルハアレン、エルンスト・トルラア、ジョン・ヘンリ・マツケイ、カール・サンドバアグ、ウキリヤム・モリス、シャルル・ヴキルドラック、W・H・ユトレイ、チャールス・フキリツプ、ヴエチエル・リンゼイ、アルチユロ・ヂオヴアニツチ、フランツ・ウエルフエル、マルセル・マルチネ、ダブリユ・ネスビツト、H・O・ウキツテイ、その他二十人の海外詩人の作品、訳者神谷暢、小野十三郎、高村光太郎、土方定一、萩原恭次郎、黄瀛、岡田刀水士、尾崎喜八、坂本七郎、片山敏彦、坂本達、草野心平。

—前橋市神明町六九　銅鑼社発行—

注

（1）「創作」七月号・「あはれなる者」
（2）大場恒明「訳詩家としての高村光太郎」「日本女子大学紀要　文学部」第37号　昭63・3
（3）『アメリカプロレタリヤ詩集』にはこの他「ダイナマイト所持者」が収録されている。この詩は「カール・サンドバアグ／人及びその作品に就いて」（「詩神」昭4・2）のなかに訳出引用されたものである。
（4）この「カール・サンドバーグ／人及びその作品に就いて」は、印象を述べれば、前半のチャップリンに言及するあたりまでは、先行する英文の紹介文の翻訳であって、後半の当時の日本の詩の状況へ関わらせている箇所は草野自身の文章であろう。ただ、現在の所、草野が依拠した英文について調査が進んでいないので、印象を述べるにとどめておく。
（5）草野心平は既に「銅鑼」15号（昭3・5）に「シカゴ」の翻訳を掲載しているが、ここに掲げたものと訳に多少の異同があるので、対応する「銅鑼」掲載の箇所を次に掲げておく。

世界の豚殺し
機具制作者　小麦の山
鉄道賭博　全国の貨物のハンドル
嵐の　シャガレ声の　ガンガン声の　二つの肩のどでつかい都会
彼等はお前の不行状を俺に告げるそして俺は彼等を信ずる
俺はお前のガスランプの下の化粧した女共が若い百姓たちをコイコイとやってゐるのを見た
そして彼等はお前をやくざ者として俺に告げる俺は答へる
そうだ　それはホントだ　俺は人を殺してまだ自由に殺しにゆける人殺しを見た
そして彼等はお前をケダモノとして俺に告げる答へはこうだ
女達や子供の顔に俺は不法なる飢餓のしるしを見た
答へ終つて俺はもう一度この　俺の都会を侮蔑する彼等に顔をむける　俺は彼等に侮蔑を返してそして言ふ
来い　頭をあげて生きる傲然を唱つてゐる都市を見せろ　無骨な強固な怜悧な都市を見せろ

(6) 初出「新潮」昭50・5、『続・私の中の流星群』(昭52・2　新潮社)所収

(7) 『草野心平研究序説』(昭59・4　教育出版センター)「第二節　二　アメリカ・アメリカ――サンドバアグ『シカゴ詩集』と『アメリカプロレタリヤ詩集』」

(8) 伊藤信吉『逆流の中の歌　詩的アナキズムの回想』(昭52・10　泰流社)「10 その周辺の二、三の動き」